

# シグナルとシグナレス

宮沢賢治

青空文庫



「ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

さそりの赤眼あかめが見えたころ、

四時けさから今朝も やつて来た。

遠野とおのの盆地ぼんちは まつくらで、

つめたい水の 声ばかり。

ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

凍こごえた砂利じゃりに 湯ゆげを吐はき、

火花やみを闇やみに まきながら、

蛇紋岩サアペンテインの 崖がけに来て、

やつと東が 燃もえだした。

ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

鳥がなきだし 木は光り、

青々川は ながれたが、

丘おかもはざまも いちめん、

まぶしい霜しもを 載のせていた。

ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

やっぱりかけると あったかだ、

僕ぼくはほうほう 汗あせが出る。

もう七、八里り はせたいな、

今日も一日 霜しもぐもり。

ガタンガタン、ギー、シユウシユウ」

軽便鉄道けいべんてつどうの東からの一れつ番列車が少しあわてたように、こう歌いながらやって来てとまりました。機関車きかんしゃの下からは、力のない湯げゆが逃げ出にして行き、ほそ長いおかしな形の煙突えんとつからは青いけむりが、ほんの少うし立ちました。

そこで軽便鉄道けいべんてつどうの電信柱でんしんばしらどもは、やつと安心あんしんしたように、ぶんぶんとうなり、シグナルの柱はかたんと白い腕木うでぎを上げました。このまっすぐなシグナルの柱は、シグナレスでした。

シグナレスはほつと小さなため息いきをついて空を見上げました。空にはうすい雲しほが縞しまにな

つていっぱいなに充ち、それはつめたいしろびかり白光を凍こおった地面じめんに降ふらせながら、しずかに東に流ながれていたのです。

シグナレスはじつとその雲の行く方ゆえをながめました。それからやさしい腕木を思い切りそつちの方へ延のばしながら、ほんのかすかに、ひとりごとを言いいました。

「今朝けさは伯母おばさんたちもきつとこつちの方を見ていらつしやるわ」

シグナレスはいつまでもいつまでも、そつちに氣をとられておりました。

「カタン」

うしろの方のしずかな空で、いきなり音がしましたのでシグナレスは急いそいでそつちをふり向むきました。ずうつと積つまれた黒い枕まくらぎ木の向こうに、あの立派りっぱな本線ほんせんのシグナル柱ばしらが、今はるか南から、かがやく白けむりをあげてやって来る列車れつしゃを迎むかえるために、その上の硬かたい腕うでを下くだげたところでした。

「お早あたらう今朝は暖かですね」本線のシグナル柱は、キッチンと兵隊へいたいのように立ちながら、いやにまじめくさつてあいさつしました。

「お早あたらうございます」シグナレスはふし目になって、声を落おとして答こたえました。

「若わかさま、いけません。これからはあんなものにやたらに声を、おかけなさらないように

ねがいます」本線のシグナルに夜電気を送る太い電信柱がさももったいぶって申しました。

本線のシグナルはきまり悪そうに、もじもじしてだまってしまいました。気の弱いシグナレスはまるでもう消えてしまいか飛んでしまいかかしたかと思いましたが、けれどもどうにもしかたがありませんでしたから、やっぱりじつと立っていたのです。

雲の縞は薄い琥珀の板のようにうるみ、かすかなかすかな日光が降って来ましたので、本線シグナルつきの電信柱はうれしがって、向こうの野原に行く小さな荷馬車を見ながら低い調子はずれの歌をやりました。

「ゴゴン、ゴゴゴ、

うすい雲から

酒が降りだす、

酒の中から

霜がながれる。

ゴゴン、ゴゴゴ、

ゴゴン、ゴーゴー、  
霜がとければ、

つちはまつくろ。

馬はふんごみ、

人もペちやペちや。

ゴゴン、ゴーゴー」

それからもつともつとつづけざまに、わけのわからないことを歌いました。

その間に本線ほんせんのシグナル柱ばしらが、そつと西風にたのんでこう言いいました。

「どうか気きにかけないでください。こいつはもうまるで野蠻やばんなんです。礼式れいしきも何も知らないのです。実際じつさい私はいつでも困こまつてるんですよ」

軽便鉄道けいべんてつどうのシグナレスは、まるでどぎまぎしてうつむきながら低ひくく、

「あら、そんなことございせんわ」と言いいましたがなにぶん風下かぜしもでしたから本線ほんせんのシグナルまで聞こえませんでした。

「許ゆるしてくださるんですか。本当を言いったら、僕ぼくなんかあなたに怒おこられたら生きていますか

いもないんですからね」

「あらあら、そんなこと」軽便鉄道の木でつくったシグナレスは、まるで困ったというように肩をすぼめました。実はその少しうつむいた顔は、うれしさにぽつと白光を出していました。

「シグナレスさん、どうかまじめで聞いてください。僕あなたのためなら、次の十時の車が来る時腕を下げないで、じつとがんばり通しても見せますよ」わずかばかりヒュウヒュウ言っていた風が、この時ぴたりとやみました。

「あら、そんな事いけませんわ」

「もちろんいけませんよ。汽車が来る時、腕を下げないでがんばるなんて、そんなことあなたのためにも僕のためにもならないから僕はやりはしませんよ。けれどもそんなことでもしよと言います。僕あなたくらい大事なものは世界中ないんです。どうか僕を愛してください」

シグナレスは、じつと下の方を見て黙って立っていました。本線シグナルつきのせいの低い電信柱は、まだでたらめの歌をやっています。

「ゴゴンゴゴ、

やまのいわやで、

熊くまが火をたき、

あまりけむくて、

ほらを逃にげ出す。ゴゴンゴ、

田螺にしはのろのろ。

うう、田螺はのろのろ。

田螺のしやつぼは、

羅紗ラシヤの上じょうとう等、ゴゴンゴゴ」

本線ほんせんのシグナルはせっかちでしたから、シグナレスの返事へんじのないのに、まるであわててしまいました。

「シグナレスさん、あなたはお返事をしてくださいらないんですか。ああ僕ぼくはもうまるでくらやみだ。目の前がまるでまっ黒な淵ふちのようだ。ああ雷かみなりが落ちおちて来て、一ぺんに僕ぼくのからだをください。足もとから噴火ふんかが起おこって、僕を空の遠くにほうりなげろ。もうなにもかも

みんなおしまいだ。雷が落ちて来て一ぺんに僕のからだを砕け。足もと……」

「いや若様、雷が参りました節は手前一身におんわざわいをちようだいたします。どうかご安心をねがいとう存じます」

シグナルつきの電信柱が、いつかでたらの歌をやめて、頭の上のはりがねの檜をぴんと立てながら眼をパチパチさせていました。

「えい。お前なんか何を言うんだ。僕はそれどこじやないんだ」

「それはまたどうしたことでござりまする。ちよつとやつがれまでお申し聞けになりとう存じます」

「いいよ、お前はだまっておいで」

シグナルは高く叫びました。しかしシグナルも、もうだまってしまいました。雲がだんだん薄くなって柔らかな陽が射して参りました。

五日の月が、西の山脈の上の黒い横雲から、もう一ぺん顔を出して、山に沈む前のほんのしばらくを、鈍い鉛のような光で、そこらをいっぱいにしました。冬がれの木や、つみ重ねられた黒い枕木はもちろんのこと、電信柱までみんな眠ってしまいました。

遠くの遠くの風の音か水の音がこうと鳴るだけです。

「ああ、僕はもう生きてるかいもないんだ。汽車が来るたびに腕を下げたり、青い眼鏡をかけたらいったいなんのためにこんなことをするんだ。もうなんにもおもしろくない。ああ死のう。けれどもどうして死ぬ。やっぱり雷か噴火だ」

本線のシグナルは、今夜も眠られませんでした。非常なほんもんでした。けれども

それはシグナルばかりではありません。枕木の向こうに青白くしよんぼり立って、赤い火をかかっている軽便鉄道のシグナル、すなわちシグナレスとても全くそのとおりでした。

「ああ、シグナルさんもあんまりだわ、あたしが言えないでお返事もできないのを、すぐあんなに怒っておしまいになるなんて。あたしもう何もかもみんなおしまいだわ。おお神様、シグナルさんに雷を落とす時、いつしよに私にもお落としくださいませ」

こう言つて、しきりに星空に祈っているのです。ところがその声が、かすかにシグナルの耳にはいりました。シグナルはぎよつとしたように胸を張って、しばらく考えていました、やがてガタガタふるえだしました。

ふるえながら言いました。

「シグナレスさん。あなたは何を祈っておられますか」

「あたし存じませんわ」シグナレスは声を落として答えました。

「シグナレスさん、それはあんまりひどいお言葉でしょう。僕はもう今すぐでもお雷さんにつぶされて、または噴火を足もとから引っぱり出して、またはいさぎよく風に倒されて、またはノアの洪水をひっかぶって、死んでしまおうと言うんですよ。それなのに、あなたはちっとも同情してくださらないんですか」

「あら、その噴火や洪水を。あたしのお祈りはそれよ」シグナレスは思い切つて言いました。シグナルはもううれしくて、うれしくて、なおさらガタガタガタガタふるえました。その赤い眼鏡もゆれたのです。

「シグナレスさん、なぜあなたは死ななければなりませんか。ね。僕へお話しください。ね。僕へお話しください。きつと、僕はそのいけないやつを追っばらつてしまいますから、いったいどうしたんですね」

「だつて、あなたがあんなにお怒りなさるんですもの」

「ふふん。ああ、そのことですか。ふん。いいえ。そのことならばご心配ありません。大丈夫です。僕ちっとも怒つてなんかいませんからね。僕、もうあなたのためなら、

眼鏡をみんな取られて、腕をみんなひっぱなされて、それから沼の底へたたき込まれたつて、あなたをうらみはしませんよ」

「あら、ほんとう。うれしいわ」

「だから僕を愛してください。さあ僕を愛するって言ってください」

五日のお月さまは、この時雲と山の端とのちようどまん中にいました。シグナルはもうまるで顔色を変えて灰色の幽霊みたいになって言いました。

「またあなたはだまつてしまつたんですね。やつぱり僕がきらいなんでしょう。もういや、どうせ僕なんか噴火か洪水か風かにやられるにきまつてるんだ」

「あら、ちがいますわ」

「そんならどうですどうです、どうです」

「あたし、もう大昔からあなたのことばかり考えていましたわ」

「本当ですか、本当ですか、本当ですか」

「ええ」

「そんならいいでしょう。結婚の約束をしてください」

「でも」

「でもなんですか、僕たちは春になったら燕にたのんで、みんなにも知らせて結婚の式をあげましょう。どうか約束してください」

「だってあたしはこんなつまらないんですわ」

「わかってますよ。僕にはそのつまらないところが尊いんです」

すると、さあ、シグナレスはあらんかぎりの勇気を出して言い出しました。

「でもあなたは金でできてるでしょう。新式でしょう。赤青眼鏡を二組みも持つていらつしやるわ、夜も電燈でしょう。あたしは夜だってランプですわ、眼鏡もただ一つきり、それに木ですわ」

「わかってますよ。だから僕はすきなんです」

「あら、ほんとう。うれしいわ。あたしお約束するわ」

「え、ありがとう、うれしいなあ、僕もお約束しますよ。あなたはきつと、私の未来の妻だ」

「ええ、そうよ、あたし決して変わらないわ」

「結婚指環をあげますよ、そら、ね、あすこの四つならんだ青い星ね」

「ええ」

「あのいちばん下の脚もとに小さな環が見えるでしょう、  
フイツシユマウスネビユラ環状星雲ですよ。あの  
 光の環ね、あれを受け取ってください。僕のまごころです」

「ええ。ありがとう、いただきますわ」

「ワツハツハ。大笑いだ。うまくやってやがるぜ」

突然向こうのまつ黒な倉庫が、空にもはばかるような声でどなりました。二人はまる  
 でしんとなつてしまいました。

ところが倉庫がまた言いました。

「いや心配しなさんな。この事は決してほかへはもらしませんぞ。わしがしつかりのみ  
 込みました」

その時です、お月さまがカブンと山へおはいりになつて、あたりがポカッと、うすぐら  
 くなつたのは。

今は風があんまり強いので、電信柱どもは、本線の方も、軽便鉄道の方もまる  
 で気が気でなく、ぐうん　ぐうん　ひゆうひゆう　と独楽のようにうなつておりました。  
 それでも空はまつ青に晴れていました。

本線シグナルつきの太つちよの電信柱も、もうでたらめの歌をやるどころの話ではあり

ません。できるだけからだをちぢめて眼を細くして、ひとなみに、ブウウ、ブウウとうな  
つてごまかしておりました。

シグナレスはこの時、東のぐらぐらするくらい強い青びかりの中を、びっこをひくよう  
にして走って行く雲を見ておりましたが、それからチラツとシグナルの方を見ました。シ  
グナルは、今日は巡查のようにしやんと立っていました。風が強くて太っちょの電  
柱に聞こえないのをいいことにして、シグナレスに話しかけました。

「どうもひどい風ですね。あなた頭がほてって痛みはしませんか。どうも僕は少しくらく  
らしますね。いろいろお話しますから、あなたただ頭をふってうなずいてだけいてくだ  
さい。どうせお返事をしたって僕のところへ届きはしませんから、それから僕の話でおも  
しろくないことがあつたら横の方に頭を振ってください。これは、本当は、ヨーロッパの  
方のやり方なんです。向こうでは、僕たちのように仲のいいものがほかの人に知れない  
ようにお話をする時は、みんなこうするんです。僕それを向こうの雑誌で見たんです。  
ね、あの倉庫のやつめ、おかしなやつですね、いきなり僕たちの話してるところへ口を出  
して、引き受けたのなんのって言うんですもの、あいつはずいぶん太ってますね、今日も  
眼をパチパチやらかしていますよ、僕のあなたに物を言ってるのはわかっていても、何を言

つてるのか風でいつこう聞こえないんですよ、けれども全体、あなたに聞こえてるんですか、聞こえてるなら頭を振ってください、ええそう、聞こえるでしょうね。僕たち早く結婚したいもんですね、早く春になればいいんですね、僕のところのぶつきりに少しも知らせないでおきましょう。そしておいて、いきなり、ウヘン！ ああ風でのどがぜいぜいする。ああひどい。ちよつとお話をやめますよ。僕のが痛くなったんです。わかりましたか、じやちよつとさようなら」

それからシグナルは、ううううと言いながら眼をぱちぱちさせて、しばらくの間だまっています。

シグナレスもおとなしく、シグナルののどのなおるのを待っていました。電信柱どもはブンブンゴンゴンと鳴り、風はひゅうひゅうとやりました。

シグナルはつばをのみこんだり、ええ、ええとせきばらいをしたりしていました。やつのどの痛いのがなおつたらしく、もう一ぺんシグナレスに話しかけました。けれどもこの時は、風がまるで熊のように吼え、まわりの電信柱どもは、山いっぱいの蜂の巣をいっぺんにこわしでもしたように、ぐわんぐわんとうなっていましたので、せつかくのその声も、半分ばかりしかシグナレスに届きませんでした。

「ね、僕はもうあなたのためなら、次の汽車の来る時、がんばって腕を下げないことでも、なんでもするんですからね、わかったでしょう。あなたもそのくらいの決心はあるでしょうね。あなたはほんとうに美しいんです、ね、世界の中にだっておれたちの仲間はいくらもあるんでしょう。その半分はまあ女の人でしょうがねえ、その中であなたはいちばん美しいんです。もっともほかの女の人僕よく知らないんですけれどね、きつとそうだと思いますよ、どうです聞こえますか。僕たちのまわりにいるやつはみんなほかですね、のろまでですね、僕のとこのぶつきりが僕が何をあなたに言ってるのかと思つて、そらごらんなさい、一生けん命、目をパチパチやってますよ、こいつときいたら全くチヨークよりも形がわるいんですからね、そら、こんどはあんなに口を曲げていますよ。あきれたばかりですねえ、僕の話聞こえますか、僕の……」

「若さま、さつきから何をべちやべちや言つていらつしやるのです。しかもシグナレス風情と、いったい何をにやけていらつしやるんです」

いきなり本線シグナルつきの電信柱が、むしゃくしゃまぎれに、ごうごうの音の中を途方もない声でどなったもんですから、シグナルはもちろんシグナレスも、まっ青になつてびたつとこつちへ曲げていたからだを、まっすぐに直しました。

「若さま、さあおつしやい。役目として承らなければなりません」

シグナルは、やっと元氣を取り直しました。そしてどうせ風のために何を言っても同じことなのをいいことにして、

「ばか、僕はシグナレスさんと結婚して幸福になつて、それからお前にチヨークのお嫁さんをくれてやるよ」と、こうまじめな顔で言つたのでした。その声は風下のシグナレスにはすぐ聞こえましたので、シグナレスはこわいながら思わず笑つてしまいました。さあそれを見た本線シグナルつきの電信柱の怒りようと云つたらありません。さつそくブルブルツとふるえあがり、青白く逆上せてしまい唇をきつとかみながらすぐひどく手をまわして、すなわち一ぺん東京まで手をまわして風下にいる軽便鉄道の電信柱に、シグナルとシグナレスの對話がいったいなんだつたか、今シグナレスが笑つたことは、どんなことだつたかたずねてやりました。

ああ、シグナルは一生の失策をしたのでした。シグナレスよりも少し風下にすてきに耳のいい長い長い電信柱がいて、知らん顔をしてすまして空の方を見ながらさつきからの話をみんな聞いていたのです。そこでさつそく、それを東京を経て本線シグナルつきの電信柱に返事をしてやりました。本線シグナルつきの電信柱はキリキリ歯がみをしな

がら聞いていましたが、すっかり聞いてしまうと、さあ、まるでばかのようになつてどなりました。

「くそつ、えいつ。いまましい。あんまりだ。犬畜生、あんまりだ。犬畜生、ええ、若さま、わたしだつて男ですぜ。こんなひどくばかにされてだまつているとお考えですか。結婚だなんてやれるならやつてごらんなさい。電信柱の仲間なかまはもうみんな反対です。シグナル柱の人たちだつて鉄道長の命令めいれいにそむけるもんですか。そして鉄道長はわたしの叔父おじですぜ。結婚なりなんなりやつてごらんなさい。えい、犬畜生いぬちくしようめ、えい」

本線シグナルつきの電信柱は、すぐ四方に電報でんぱうをかけました。それからしばらく顔色を変かえて、みんなの返事へんじをきいていました。確かにみんなから反対はんたいの約束やくそくをもらったらしいのでした。それからきつと叔父のその鉄道長とかにもうまく頼たのんだにちがいありません。シグナルもシグナレスも、あまりのことに今さらポカンとしてあきれいていました。本線シグナルつきの電信柱は、すっかり反対の準備じゆんびができると、こんどは急に泣なき声で言いいました。

「あああ、八年の間、夜ひる寝ねないでめんどうを見てやつてそのお礼れいがこれか。ああ情なさけ

ない、もう世の中はみだれてしまった。ああもうおしまいだ。なきけなない、メリケン国のエジソンさまもこのあさましい世界をお見すてなされたか。オンオンオンオン、ゴゴンゴ  
ーゴーゴゴンゴー

風はますます吹きつものり、西の空が変に白くぼんやりなって、どうもあやしいと思つて  
いるうちに、チラチラチラチラとうとう雪がやって参りました。

シグナルは力を落として青白く立ち、そつとよこ眼でやさしいシグナレスの方を見ま  
した。シグナレスはしくしく泣きながら、ちようどやって来る二時の汽車を迎えるためにし  
よんぼりと腕をさげ、そのいじらしいなで肩はかすかにかすかにふるえておりました。空  
では風がフイウ、涙を知らない電信柱どもはゴゴンゴーゴゴンゴーゴー。

さあ今度は夜ですよ。シグナルはしよんぼり立つておりました。

月の光が青白く雲を照らしています。雲はこうこうと光ります。そこにはすきとおつて  
小さな紅火や青の火をうかべました。しいんとしています。山脈は若い白熊の貴族  
の屍体のようにならずかに白く横たわり、遠くの遠くを、ひるまの風のなごりがヒユウと鳴  
つて通りました。それでもじつにじつにすかです。黒い枕木はみな眠り、赤の三角や黄色

の点々、さまざまの夢ゆめを見ている時、若いあわれなシグナルはほっと小さなため息いきをつきました。そこで半分凍こえてじつと立っていたやさしいシグナレスも、ほっと小さなため息をしました。

「シグナレスさん、ほんとうに僕ぼくたちはつらいねえ」

たまらずシグナルがそつとシグナレスに話しかけました。

「ええ、みんなあたしがいけなかつたのですわ」シグナレスが青じろくうなだれて言いいました。

諸君しよくん、シグナルの胸むねは燃もえるばかり、

「ああ、シグナレスさん、僕たちたつた二人だけ、遠くの遠くのみんなのいないところに行つてしまいたいね」

「ええ、あたし行けさえするなら、どこへでも行きますわ」

「ねえ、ずうつとずうつと天上にあの僕ぼくたちの婚約指環エンゲージリングよりも、もっと天上に青い小さな小さな火が見えるでしょう。そら、ね、あすこは遠いですねえ」

「ええ」シグナレスは小さな唇くちびるで、いまにもその火にキッスしたそうに空を見あげていました。

「あすこには青い霧きりの火もが燃もえているんでしようね。その青い霧の火の中へ僕たちいっしょにすわりたいですねえ」

「ええ」

「けれどあすこには汽車はないんですねえ、そんなら僕ぼく畑たけをつくろうか。何か働はたらかないといけないんだから」

「ええ」

「ああ、お星さま、遠くの青いお星さま、どうか私わたしどもをとってください。ああなさげぶかいサンタマリヤ、まためぐみふかいジヨウジ スチブソンさま、どうか私わたしどものかない祈いのりを聞いてください」

「ええ」

「さあいっしょに祈りましょう」

「ええ」

「あわれみふかいサンタマリヤ、すきとおる夜の底そこ、つめたい雪の地面じめんの上になさしくいのるわたくしどもをみそなわせ、めぐみふかいジヨウジ スチブソンさま、あなたのしもべのまたしもべ、かなしいこのたましいの、まことの祈りをみそなわせ、ああ、サンタ

マリヤ

「ああ」

星はしずかにめぐって行きました。そこであの赤眼あかめのさそりが、せわしくまたたいて東から出て来、そしてサンタマリヤのお月さまが慈愛じあいにみちた尊とうとい黄金きんのまなざしに、じつと二人を見ながら、西のまつくろの山におはいりになった時、シグナル、シグナレスの二人は、祈りにつかれてもう眠ねむっていました。

今度こんどはひるまでです。なぜなら夜昼よるひるはどうしてもかわるがわるですから。

ぎらぎらのお日さまが東の山をのぼりました。シグナルとシグナレスはぼつと桃色ももいろに映はえました。いきなり大きな幅はばひろ広い声こゑがそこらじゅうにはびこりました。

「おい。本線ほんせんシグナルつきの電信柱でんしんばしら、おまえの叔父おじの鉄道長てつどうちやうに早くそう言いって、あの二人はいつしよにしてやった方がよからうぜ」

見るとそれは先ごろの晩ばんの倉庫そうこの屋根やねでした。倉庫の屋根は、赤いうわぐすりをかけた瓦かわらを、まるで鎧よろいのようにキラキラ着き込んで、じろつとあたりを見まわしているのです。

本線シグナルつきの電信柱は、がたがたとふるえて、それからじつと固かたくなつて答え

ました。

「ふん、なんだと、お前はなんの縁故えんこでこんなことに口を出すんだ」

「おいおい、あんまり大きなつらをするなよ。ええおい。おれは縁故と言えば大縁故さ、縁故でないとさえいって、いっこう縁故でもなんでもないぜ、が、しかしさ、こんなことにはてめえのような変へんちきりんはあんまりいろいろ手を出さない方が結けつきよく局よくてめえのためだろうぜ」

「なんだと。おれはシグナルの後見人こうけんじんだぞ。鉄道長の甥おいだぞ」

「そうか。おい立派りっぱなもんだなあ。シグナルさまの後見人で鉄道長の甥おいかい。けれどもそんならおれなんてどうだい。おれさまはな、ええ、めくらとんびの後見人、ええ風引きの脈みやくの甥おいだぞ。どうだ、どっちが偉えらい」

「何をつ、コリツ、コリコリツ、カリツ」

「まあまあそう怒おこるなよ。これは冗談じょうだんさ。悪く思わんでくれ。な、あの二人さ、かあいそうだよ。いいかげんにまとめてやれよ。大人おとならしくもないじゃないか。あんまり胸むねの狭せまいことは言わんでさ。あんな立派りっぱな後見人こうけんじんを持って、シグナルもほんとうにしあわせだと言われるぜ。まとめてやれ、まとめてやれ」

本線ほんせんシグナルつきの電信柱でんしんばしらは、物を言おうとしたのでしたが、もうあんまり気が立ってしまつてパチパチパチ鳴るだけでした。倉庫そうこの屋根やねもあんまりのその怒りように、まさかこんなはずではなかつたと言うように少しあきれて、だまつてその顔を見ていました。お日さまはずうつと高くなり、シグナルとシグナレスとはほつとまたため息をついてお互いたがに顔を見合わせました。シグナレスは瞳ひとみを少し落とし、シグナルの白い胸むねに青々と落ちた眼鏡めがねの影かげをチラツと見て、それからにわかにも目をそらして自分のあしもとをみつめ考え込んでしまいました。

今夜あたたは暖かです。

霧きりがふかくふかくこめました。

その霧とを徹とおして、月のあかりが水色に少しずつに降り、電信柱も枕木まくらぎも、みんな寝ねしずまりました。

シグナルが待つていたようにほつと息いきをしました。シグナレスも胸むねいっぱいのおもいをこめて、小さくほつといきました。

その時シグナルとシグナレスとは、霧の中から倉庫の屋根の落ちついた親切らしい声の

響ひびいて来るのを聞きました。

「お前たちは、全まったくきのどくだね、わたしたちは、今朝うまくやってやろうと思っただが、かえつていけなくしてしまった。ほんとにきのどくなことになったよ。しかしわたしには、また考かんがえがあるから、そんなに心しんぱい配はいしないでもいいよ。お前たちは霧きりでお互たがいに顔も見えずさびしいだろう」

「ええ」

「ええ」

「そうか、ではおれが見えるようにしてやろう。いいか、おれのあとについて二人いっしょにまねをするんだぜ」

「ええ」

「そうか。ではアルファー」

「アルファー」

「ビーター」 「ビーター」

「ガムマー」 「ガムマーアア」

「デルター」 「デルターアアアア」

実に不思議です。いつかシグナルとシグナレスとの二人は、まっ黒な夜の中に肩をならべて立っていました。

「おや、どうしたんだろう。あたり一面まっ黒びろうどの夜だ」

「まあ、不思議ですわね。まっくらだわ」

「いいや、頭の上が星でいっぱいです。おや、なんとという大きな強い星なんだろう。それに見たこともない空の模様ではありませんか、いったいあの十三連なる青い星はどこにあったのでしょうか、こんな星は見たことも聞いたこともありませんね、僕たちぜんたいどこに来たんでしょうね」

「あら、空があんまり速くめぐりますわ」

「ええ、ああ、あの大きな橙の星は地平線から今上ります。おや、地平線じゃない。水平線かしら。そうです。ここは夜の海の渚ですよ」

「まあ奇麗だわね、あの波の青びかり」

「ええ、あれは磯波の波がしらす、立派ですわねえ、行ってみましょう」

「まあ、ほんとうにお月さまのあかりのような水よ」

「ね、水の底に赤いひとでがいますよ。銀水のなまごがいますよ。ゆっくりゆっくり、

這はつてますねえ、それからあのユラユラ青あびかりの棘とげを動とかしているのは、雲丹うにですね。  
波なみが寄よせて来きます。少し遠とほのきましよう」

「ええ」

「もう、何なにべん空そらがめぐつたでしょう。たいへん寒さむくなりました。海うみがなんだか凍こつたよ  
うですね。波なみはもう、うたなくなりました」

「波なみがやんだせいでしょうかしら。何か音ねがしていますわ」

「どんな音」

「そら、夢ゆめの水車すゐぐるまのきしりのような音」

「ああそうだ。あの音だ。ピタゴラス派はの天球運動てんきゅううんどうの諧音かいおんです」

「あら、なんだかまわりがぼんやり青白あざわかくなつてきましたわ」

「夜よが明あけるのでしょうか。いやはてな。お立派りっぱだ。あなたの顔かほがはっきり見える」

「あなたもよ」

「ええ、とうとう、僕ぼくたち二人ふたりきりですね」

「まあ、青白あざわかい火かが燃もえてますわ。まあ地面じめんと海うみも。けど熱あつくないわ」

「ここは空そらですよ。これは星ほしの中の霧きりの火かですよ。僕ぼくたちのねがいがなつたんです。あ

あ、さんたまりや」

「ああ」

「地球ちきゅうは遠いですね」

「ええ」

「地球はどっちの方でしょう。あたりいちめんの星、どこがどこかもわからない。あの僕のブツキリコはどうしたろう。あいつは本当はかあいそうですね」

「ええ、まあ、火が少し白くなつたわ、せわしく燃えますわ」

「きつと今秋ですね。そしてあの倉庫そうこの屋根やねも親切せんせつでしたね」

「それは親切せんせつとも」いきなり太い声ふとがしました。気がついてみると、ああ、二人ともいっしょに夢ゆめを見ていたのです。いつか霧きりがはれてそら一めんの星が、青や橙だいだいやせわしくせわしくまたたき、向むこうにはまつ黒な倉庫そうこの屋根やねが笑わらいながら立たっておりまし。

二人はまたほつと小さな息いきをしました。





# 青空文庫情報

底本：「ゼロ弾きのゴージュ」角川文庫、角川書店

1957（昭和32）年11月15日初版発行

1967（昭和42）年4月5日10版発行

1993（平成5）年5月20日改版50版発行

初出：「岩手毎日新聞」

1923（大正12）年5月

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2008年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# シグナルとシグナレス

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>